

千葉省三童話全集

(第六卷)

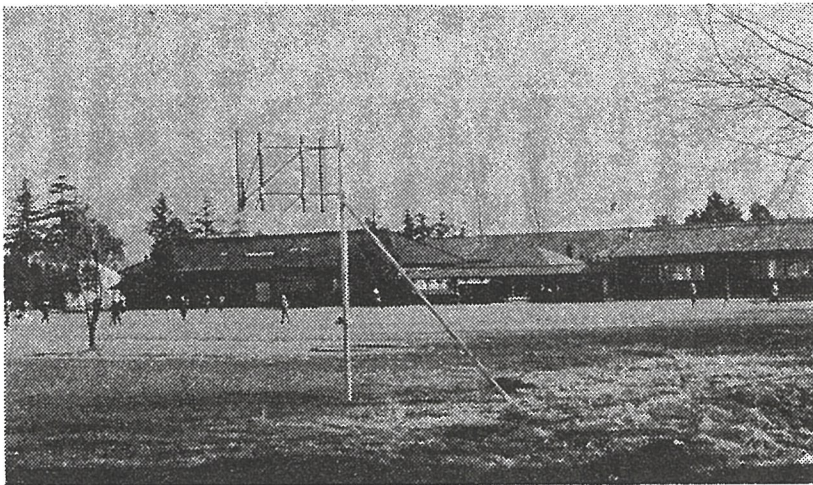
6 月 報

目 次

兄省三のこと……………千葉芳男(二)
がっこの省ちゃん……………田中英雄(四)
千葉文学あれこれ……………関 英雄(五)
編集を終って……………小西正保(七)

東京都文京区
水道 1-9-2

岩崎書店



磯高等小学校跡(現在の南押原小学校)

がっこの省ちゃん

本全集も今号にて完結、月報には御実弟の千葉芳男氏、省三先生の幼な友達田中英雄氏、編集委員の一人関英雄氏、および小社から小西と、内輪めいたこぼれ話などをお願いしてみました。思えば湯沢に川上四郎先生を訪ねての帰り、暮れなずむ晩夏の足利郊外に千葉芳男氏をたずねたり、また編集に協力して下さった池田氏と田中英雄氏との交友など、一つの仕事を通じて、多くのすばらしい人を知りえたことは私共にとって大きな喜びでした。御協力と御高評を感謝いたします。(山崎記)

兄省三のこと

千葉芳男

少年時代の兄

僕達兄弟は七人生れたのだそう(男六人女一人)が皆夭折してしまつて育つたのが兄と僕の二人だけ。これはどうやら二人共七十の坂を越えてまだ元気に過している。

兄は少年時代は非常にひ弱だったらしく両親も随分と心配した様だった。だが俗にいう秀才型とでもいうのだろうか、昔のことだから数えの五才で小学校に入学してしまつて各学年とも何時もトップだったそう。その頃はまだ校医があつたわけではなく、従つて学校での身体検査なども無かつた。とにかくチビでひ弱で身長は学年でのどん尻、皆からはチビチビと呼ばれてゐたとか、それ位だから運動や戸外での遊びはあまり好きな方ではなかつたらしい。何時も座敷の隅で雑誌や本ばかり読んでいたという。それだけに父は一人兄を愛し出張の折々には兄にだけは必ず本を買つて帰り、且つ毎月雑誌もとつてやつていた。その頃から作文が勝れていたらしく父の眼は細るばかりであつた。

中学一年生の時だったろう。一、二年が日光に遠足して紀行文を書かせられ、それが一、二年を通じて最優秀とあつて校友

会雑誌に掲載され一躍文才を認められた。四年五年の頃には同誌の編集部員、部長等を命ぜられた。こんな事が将来の生活への大きな原動力となったのではなからうか。

兄が何才の頃だったか。本ばかり読んでいたので母に外で遊んで来るよう注意され、ふしうぶしう出かけて行った。小一時間程してから子供が「省ちゃんが怪我した」と知らせて来たので、父が驚いて迎えに行ったら、肘（右？ 左？）の関節脱臼とその上に捻じってしまったらしく、中々の大怪我だった。話によると豊ちゃんの家の本の葉小屋（当時は農家で堆肥にするため冬の農閑期に、山から木の葉を掻き、山の様に積んで置いたもので子供達のよい遊び場であった。）で相撲を取ったのだという。ふだんからひ弱の方であり運動も好まなかった位だから他の子供にくらべると筋骨も不充分で、こんな結果を招いたのだろう。なにしろ水泳だって弟の僕の方が早く覚え、兄よりは上手だったのだから。

兄が丈夫になったのは中学校（現宇都宮高校）に入ってからだ。まだ中学一年の時には相撲をしても僕と勝ったり負けたりだったのが二年になってからは、どうしても兄に勝てなかった。この頃から柔道部に入って鍛え初めたのだ。こんなことがあった。僕が母に叱られ、口惜しまぎれに庭にとび出し、玄關に石を投げ込んでいたところ何時の間に学校から帰って来たのか不意に後から首をしめられ三つ四つ拳骨を喰ったことを記憶している。この頃は全く兄には手が出なかった。

兄は僕にとっては優しい兄だった。勿論子供のことだから時には組うちの喧嘩もした。だが何処へ遊びに行くにも必ず誘っ

て連れて行って呉れた。思い出は尽きない程ある。栗取り、茸取り、水泳、魚捌き等々。稍長じて、兄が中学五年の時に僕が宇都宮の師範学校に入学したのだが、生れて初めて親元を離れ、その上軍隊式の厳しい寮生活。毎日毎日が辛かった。その日曜の折々に兄が訪れて呉れ、時には一緒に連れ出しても呉れた。どんなにうれしかったことか。兄は寮内の上級生達にも相当知り合があったらしく、親の光りならぬ兄の光りか、お蔭で上級生からも案外優しく目をかけられ、下級生としての寮生活もどうやら過せたのだ。

青年時代の兄（中卒後上京するまで）

この頃の兄の動勢についてはあまりよく知らない。というのは僕は学生生活で休暇で帰省した時ぐらいが一緒の生活だったからだ。

兄が中学を卒業して高等学校の受験準備中盲腸炎にかかり生き死の騒ぎをした事があった。今でこそ盲腸炎は病気の中では無いという程になったが、其の当時は切開手術などは思いもよらないこと、患部を冷やすのと呑み薬だけ、後は成行きまかせという状態で、田舎などでは苦しみ死にするだけだった。兄のも殆んど化膿の状態にまでなったのだが、幸い鹿沼の病院に宮様の盲腸炎を癒した時の処方箋を持っていた医師がいて、その薬をくれた。それでどうやら命だけはとり止めたものの衰弱が甚だしく回復に手間どって受験は断念せざるを得なくなった。

稍回復したと思ったら今度は痔の手術。県立病院で全身麻酔の上実施、こんな始末で二年近くぶらぶらの生活が続いた。身体

なり毎日三キロ程の道を歩行往復、これが回復を早めたのだろう。めきめき元気になって来た。

当時の田舎には風紀上の問題が可成り多く青年の間でも喧嘩やもめ事が屢々起った。憂える人はあっても一朝一夕にはどうにもならぬ。兄は同年輩の将来村の中堅になりそうな人達数人を糾合して話合いの会をつくり毎週会合した。青年を指導するには「自分から青年の中に溶け込んで生活も共にする位でなければ駄目なんだ」と兄に教えられた。兄はよく遊び酒も飲むようになった。仲間からは御大と呼ばれ尊敬もされ全くの中心的存在になった。遊ぶだけでは仕方がない。何か精神的の糧をと、そこで大衆文学と謂れる俳句を懇懇した。皆喜んでついて来て、上達も実に目覚しかった。当時の俳誌南柯に加入、盛大



千葉省三兄弟と母（明治35年）

な句会も屢々行なわれた。前の人達の外に数人の加入者もあり自分の意図も半ば達成した。然しこの頃は兄の心はずでに東京に行っていたのではなからうか。それから間もなく上京して行った。仲間に慕われつつ。

度胸だめし

僕達の小さい頃住んでいた所は、学校の一隅にある教員住宅であった。庭は校庭と一緒に西端は低い土堤一重で墓場になっている。ひどい草薺木藪が北から東へかけて茂り、その中に大小の墓石と新旧仏の土饅頭と提灯やら吊旗がたっていた。夕方から夜になると妙な声で夜鷹が鳴き梟が鳴いたりする。昼はともかく夜になると外には出られなかった。或る時、今夜度胸だめしをやるのだと近所の友達が数人僕の家を集まって来た。化物の話、狐にばかされた話などした後、墓場の中程にある墓石の上に手拭を置いて来る。次の者がそれを持ち帰る。月も星もない真暗な晩だった。誰が最初行くかということになると誰も尻込みして俺がという者がいない。そしたら兄が「そんなら俺が行く」と立ち出した。皆がぼかんとした顔をしている中に兄は外に出て行った。しばらくすると兄は帰って来たが平気な顔をしている。そして「芳男。今度はお前行け」といった。僕はどうしても尻が上らない。臆病な僕はきつと顔色まで変ってしまったのだったらう。然し僕の外の者も誰一人として行くものはなかった。

甘柿渋柿

僕の家は東側畑一枚へだて、役場があった。垣根とて小さな生垣だけの庭続き、その役場の庭先きに小使の爺さんが仕立て

柿の木が五六本、小さく仕立てて枝が四方に伸び実がなると土につく程たれ下る。或る柿の当り年の時だった。青柿が一杯について間もなく十五夜になるうとする頃。曇った夜をねらって兄と二人で盗りに行った。小使室から灯が射している。足音をこゝろして木陰を縫いながら、あの木から二つ、この木から一つと、手探りで五つ位ずつもいで来た。家に持ち込めないで庭先にうごくまうって囁いて見ると、口が動かなくなる程深い。「兄さん、黙れ、駄目だ。どこへ捨てよう。」「前の藪へ捨てちまい。」「芳男甘いがあるぞ。小さくて尖っているのだ。」といわれたが僕にはなかった。兄も一つしか無かったのだろう。囁りかけを半分呉れた。後はみな藪にほうり込んでしまった。翌日僕はどの木が甘かったのか何食わぬ顔で調べて来て兄に話したら、赤くなるまで待とうというので、それなりになつてしまった。この柿も漸やく色づき初め、人目につく様になった或晩のこと、若い衆に襲われ大変な被害をうけた。小使さんが怒って木の下に下肥を撒きちらした。僕が庭で遊んでいる時小使さんが大きいのを三つ四つもいでくれた。口の曲がる程深かった柿ももうすっかり甘くなっていた。兄と分けっこして食べた味もまた格別だった。(足利市在住)

がっこの省ちゃん

田中英雄

少年の頃

トテ馬車に出て来るあれ等の児群、僕もその児群の一人だった。学校の省ちゃんは白井豊吉君と共に何時も餓鬼大将であった。此の両雄は何れも特長を持っていたが、特に省ちゃんは僕

等の遊び事に創意を加えて遊び回った。例えば、木の葉小屋で芝居ごっこを催した時など曾我兄弟の敵討を七五調の新体詩にふしをつけて朗読させ、其詩に合せて祐経の陣屋に忍び込んで討取るまでを、竹ん棒に藁を縛りつけた松明をかざさせたり眉や目尻に墨を塗らせて演技させたりして、見物に来た母ちゃん姉ちゃん達を感涙させるような演出ぶりであった。

字中時代

やがて宇都宮中学時代になると、先輩だった半田良平さんが、休暇になるとよく遊びに来られたのを思い出す。ある時僕は角帽かぶった半田さんが深津の家へ帰るのを省ちゃんの後をついて送って行った。黒川橋の辺で省ちゃんが懐から有朋堂文庫の古今著聞集を出して坊主のエロの事を書いた所を読んで見せて二人で笑っていた事などを思い出すのである。あとで芳男君から借りて読んでみたが国文力が低級で読みこなせなかった。省ちゃん等あんなにすらすら読めるのにと熱心に古文の読解力をつけようとあせった頃もあった。

卒業後

僕が教師になったばかりの頃、スケッチブックを見せた時其の中の二点を省ちゃんが選んで大へん褒めてくれて嬉しかった。それは放し飼いのレグホンが三羽、竹の枝の垣根の内側で餌をあさっている所に単彩を施した図柄、今一つは夏休みに水郷へ遊んだ時水辺の草と向うにたつ四五本のポプラを無雑作に写生した鉛筆画であった。其頃省ちゃんは磯の小学校に教鞭を執られ教え子の鈴木周三、鈴木一君等のすばらしい作品を見せてくれた。僕が指導法を聞いたなら「図画も作文も暗示を与えて

子供に意欲を起させる」と言っていた。僕は同級の弟芳男君と親しかったので毎日ぐらい校長住宅へ遊びに行った。ある時省ちゃんが西洋美術の本を開いて君この絵が解るかと指した。ベックリンの「死の島」である。暗い海の島の洞窟の方へ這ってゆく一隻の小さな舟が描かれてあった。主観的な灰色の陰気なその絵に感動したことであった。省ちゃんの影響はこればかりではない。俳号を栗堂と称し沐冠連というグループを作り、時々集まって運座を開き、連中から御大将と呼ばれていた。運座の夜は句作の外雑談に耽り、文学や思想や女のことなど語り合つて夜の十二時頃寝静まった寒夜の例幣使街道に下駄を鳴らしながら家路を急いだ。その同人、街道端も島中も官員鍛冶も箒の三郎平も次々と抜歯の如く此世を去ってしまった。芳男君より今度は省ちゃんの方が繁く遊びに来てくれるようになった。多く夕飯後である。やに止めに羅字と雁首の境目を干瓢で巻いた煙管を炬燵の火に突込み、刻み煙草を吸いながら語り合ったあの頃がなつかしい。自作の俳句などを披露しながら

○糞茸朽つ 日頃大牛 霞むかな

○夕立の雲 草を噛んで 闇迫る

○秋雨や 傘さしてゆく 小雪陰

○櫓とろく 何処の峯ぞ 雪崩おつ

など格調高い其頃の句が想い出される。郷土研究という雑誌は本当に良い雑誌だというので僕も書店から取って見たら柳田国男先生の民俗学の雑誌で、ほととぎすの鳴声について秩父地方の伝説だの、おとら狐の話だのと、これは又面白い研究の分野があるものかなと続けて読んだが間もなく廃刊になった。

以上一連の省ちゃんの趣味のテンデンシーが、やがて著名な童話作家たらしめたのではないかと僕は思う。

やがて増渕女史と結婚されて上京、創作に専念されたことである。上京当時第一信の葉書惜しいかな紛失したが、今でもその名文句の書出しを思い出せる。「朝に門を出づるや脱兎の如く、夕に家に帰るや処女の如し、疲労困憊は一日焦心の酬い……我に意志なくば云々」と固い決意で上京し進んでこの難に当り初志を貫かねば止まぬというような大意であったと思う。その後私は絶えて御無沙汰をしたが、先生はその間次々と珠玉の童話を創作されて、今や千葉省三童話全集六巻が完結されたのである。この偉業に心から敬意を表すると共に私は青春時代良き友に恵まれた事を感謝する。(鹿沼市楡木在住)

千葉文学あれこれ 関 英雄

表紙、カバー共に渋い和風装幀で出た、千葉さんの処女童話集『トテ馬車』(昭和四)の初版部数は五百部だった。たった五百部? と、のちに、聞いた私も思ったが、昭和初期では文壇の有力新人の短編集でも初版五百はザラだった。この出版について、千葉さんと親交のあった童謡詩人島田忠夫氏(故人)が、後藤樞根さん主宰の雑誌『童謡詩人』昭和四年八月号に「田蛙雑記」という一文を寄せている。――『トテ馬車』が土田耕平氏のあつせんで出版と決まったあと、千葉さんがそれまでの発表作を自選して浄書しはじめたことを島田氏は書き、尤もこの作者だけに毎日浄書をして、毎日原稿の減るのも珍現象である。どの位厳選されたかは、作者に長く親しんだ人々

が、今度の『トテ馬車』一巻を手に入れば、直ちに誰しもが感ずる所である」と述べているのがおもしろい。自作にきびしい千葉さんの面目を伝えている。そんなところから、戦前に出た自選作品集数冊の中に、「少年のころ」も「無人島漂流記」も入らなかったものようだ。こんどのこの全集所載の作品の一部も、編集委員が作者を口説いて載せたものであることを、ついでにしるしておきたい。

この全集三巻の解説で、千葉さんが「けんか」という作品から、この作品をその一つとする「子ども銘々伝」を書きたかったと語ったことを記したが、その連作は「書かれざる作品」となった。千葉さんは、若い日ラゲルレフの「ニルスのふしぎな旅」を愛読して、樺太から台湾（共に戦前の日本領土）まで、日本縦断の物語を書きたいと考えたと、のちに語ったが、これも書かれざる作品の一つといえよう。

私自身に関係の深い「書かれざる作品」がもう一つある。太平洋戦争中、私は帝国教育会出版部（のちの国民図書刊行会）という社で月刊絵本の編集をしていたが、同社の編集顧問格の与田準一さんとともに、『少年郷土文学叢書』という、長編少年文学シリーズを企画した。各地方出身の作家に、郷土での少年期体験、または現在の郷土の子ども像を作品化してもらおうというものだった。戦争下でも、民族のふるさとをうたう郷土愛物語は発表の制約を受けることが少なかったため、そこに取りついて、軍国色を避けようというのが、私などの考えだった。

紀州の子どもを佐藤春夫氏に、大阪の子どもを宇野浩二氏に、北海道の子どもを伊藤整氏に、土佐の子どもを上林暁氏にというふうに、おもに小説家に頼んだが、千葉さんに栃木県の子どもの書いてもらうことになり、私が荻窪の千葉家を訪ねて依頼した。『児童文学』廃刊（昭和十二）後、千葉さんは童話創作から遠ざかっていたので、書いてもらえるかどうか案じたが、「久しぶりに書いてみたくなった。やってみましょう」と引受けてくれた。千葉さんは思い出でなく、現在の栃木の開拓部落の農民の子どもを書いてみたいという。これが出来れば今までの千葉文学とは趣きの変ったものが出来るかもしれないと、私は喜んで社へ戻り、与田さんにも報告した。千葉さんは取材に栃木まで出かけたらしい。

千葉さんはこの作品のことで、初めて阿佐ヶ谷の私の家へ訪ねてくれたりもしたが、なかなか構想がまとまらず、数ヶ月して執筆断念を申し出てこられた。戦時下の郷土の現実と千葉文学のイメージの食い違いが大きかったようだ。まもなく千葉さんは新潟県に疎開した。他の作家の原稿もなかなか出来ず、結局伊藤整氏の「雪国の太郎」と津村信夫氏の作品が出版されただけで、この叢書はあまり稔らなかった。東京は、空襲が激しくなり、印刷所も焼けて、執筆も出版も難しかったのが大きな原因だった。（児童文学者・本全集編集委員）

編集を終わって

小西正保

私はじめて千葉先生のお宅へ伺ったのは、たしか昭和四十年の秋であったと思う。関英雄氏にご同行を願って、そのと

き正式に千葉省三童話全集の出版についてお許しをいただいたのであった。

はじめてお目にかかる千葉先生は、とても七十四歳とは思えぬほどお元気であった。血圧が少し高いとうかがっていたが、お顔の色などもつやがあり、ややうすい髪の毛も決して白くはなかった。終始温顔に微笑をたたえられ、全集の出版については一切を編集委員会の方にお任せするからと言われた。お話をしながら、先生ご自身でお茶を入れてくださるのだが、魔法びんにお湯がなくなると、先生は奥の間をふり返って、「かあちゃん、お茶」と声をかけられた。低いが、しかしはりのあるお声だった。その栃木なまりの抑揚に、すぐ私は先生の作品の世界を連想したが、同時に私は、そのひびきのなかに一種のおかしがたい威厳のようなものを感じたのだった。

この全集のために、とくに新しくご執筆いただいた「父母の記」の原稿は、それぞれ一巻と六巻の配本に間にあうように、二回に分けていただいた。この原稿をいただくとき、二度とも先生は原稿を読んでくださった。お約束の日時に先生のお宅へ伺うと、先生はちょっと顔をだされて、「もう少し手を入れ直すから」と、すぐに別室へひっこまれてしまう。しばらくお待ちしていると、「どうも、何べん書き直しても気に入らなくて」といわれながら、原稿をもって部屋へ出てこられる。そして、かたわらの夫人をふりかえりながら「かあちゃん、読んでみょうか」と、静かにいわれるのである。

本巻所収の「続父母の記」をお読みになれば想像していただけると思うが、終章近く、父亀五郎終焉の部分など、私はある

感動をもって耳をかたむけないではいかなかった。

夫人から伺ったお話によれば、むかしから先生は何回も何回も納得がゆかれるまで原稿を書き直されたという。とかくすると千葉童話の世界は、先生の直接的な幼少年期体験を素直に文章化されているというふうに受けとられがちであるけれども、実はそうではなくて、文章上、構成上、苦心に苦心を重ねて生みだされた世界であったことがこのことから類推できる。

「子どもの本は、なんといってもおもしろくて、しかも文学になつていなければなりません」ということを、この全集の仕事で、何度か私は先生の口からうかがった。かつて先生が編集された雑誌『童話』自身が、そういう主張のもとに生まれた雑誌であることを思えば、これは先生にとって変わることにない児童文学に対する根本姿勢であった。

戦後『子どもと文学』（石井桃子編）の中で「子どもの文学はおもしろく、はっきりわかりやすく」ということが提起され、私の考えでは、よかれあしかれ戦後の児童文学はこのことをふまえて出発していると思うのだが、千葉先生は、すではやくこうした児童文学の本質を直感的、経験的にとらえて、それを実践してこられた数少ない児童文学者の一人であった。

ともあれ、第六巻『無人島漂流記』の配本をもって、つつがなく千葉省三童話全集の刊行を終る。子どもたちのためによい遺産をという編集者としての私どもの願いが、こうしてまたひとつかなえられたことをこの上なくうれしいと思う。

千葉先生のご健康とご長寿を心から祈ってやまない。

（岩崎書店勤務）

●刊行のことば

賢治童話のふしぎな魅力はひとくちにはいえません。

おかしい動物や石や電信柱の話もあれば、風も雪もかがやく岩手の美しい風土と人びとの営み、あるいは苦しみをのりこえて大きな理想へ向かう切ない物語など、どの作品もよめばよむほど面白く、すがすがしく、また火のような感動につつまれます。

この新版『宮沢賢治童話全集』は、原稿を徹底的に検証した「校本宮沢賢治全集」（筑摩版）により完稿作品七十九編を収めました。配列は比較的読みやすい作品からはじめて次第に高度な内容に進むよう、また多様な世界を一卷の中に読みとれるよう、あるいは一つの目的にそって収録するなど、編集方針は読書段階を考慮したほか、当用、教育漢字、総ルビ、現代かなづかいに加えて句読点を適宜ほどこし、難解なことばには注釈をつけました。

なお第十二巻は宮沢清六「兄、賢治の一生」と「雨ニモマケズ」など詩、短歌、綴方および書簡を時代別に編集し、賢治の生涯をたどるようにしました。

新版 宮沢賢治童話全集（全12巻）

●編集／宮沢清六 堀尾青史 ●装幀／安野光雅

- | | | | |
|----|-----------|---------------------------|-------|
| 12 | 雨ニモマケズ | 詩 短歌 綴方 書簡のほか「兄、賢治の一生」等収録 | 資料写真 |
| 11 | 銀河鉄道の夜 | 標題作に加えグスコープドリの伝記 雁の童子を収録 | 司 修・画 |
| 10 | ポラーノの広場 | イーハトーボ農学校の春 イギリス海岸 | 他三編 |
| 9 | 風の又三郎 | 北守將軍と三人兄弟の医者 税務署長の冒険 | 他二編 |
| 8 | セロひきのゴージュ | 度十公園林 草トランク 化場丁場 | 他五編 |
| 7 | オツベルと象 | ねこの事務所 台川 櫓の木大学士の野宿 | 他二編 |
| 6 | なめとこ山のくま | 山男の四月 祭の晩 紫紺染について | 他六編 |
| 5 | よだかの星 | カイロ団長 月夜のでんしんばしら | 他五編 |
| 4 | 注文の多い料理店 | よくきく薬とえらい薬 車 土神ときつね | 他五編 |
| 3 | どんぐりと山ねこ | 貝の火／どんぐりと山ねこ／鳥をとるやなぎ | 他五編 |
| 2 | ふた子の星 | やまなし／ありとぎのこ／いちようの実 | 他七編 |
| 1 | ツエねずみ | 月夜のけだもの／鳥箱先生とフウねずみ | 他九編 |

横山泰三・画

中谷千代子・画

深沢紅子・画

味戸ケイコ・画

赤羽末吉・画

斎藤博之・画

井上洋介・画

太田大八・画

深沢省三・画

箕田源二郎・画

司 修・画

資料写真